

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：25503

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12351

研究課題名(和文) 日本でのラフカディオ・ハーン像の形成において邦訳が果たす役割

研究課題名(英文) The Roles of Translation in Shaping Lafcadio Hearn's Popular Images in Japan

研究代表者

風早 悟史 (Kazahaya, Satoshi)

山陽小野田市立山口東京理科大学・共通教育センター・講師

研究者番号：00710344

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が日本時代に書いた作品の邦訳を取り上げ、トランスレーション・スタディーズの成果も援用しながら、それらがどのように邦訳されているのかを分析することにより、翻訳が形作ってきた作品像や作家像を明らかにした。また、翻訳の延長線上にある行為として翻案(アダプテーション)にも目を向け、ハーンの怪談作品の映画版の翻案手法を分析し、これまでのハーン研究も参照しつつ、それらが独自の作品解釈を提示していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の作品の邦訳の歴史は長く、現在まで100年以上にわたり、数多くの作品がさまざまな研究者・翻訳家によって日本語に訳されてきた。それらの中には、狭義の翻訳作品だけではなく、映画やアニメーション、絵本など、より広く翻案(アダプテーション)と呼び得るものも含まれる。本研究の学術的意義は、それらの翻訳・翻案作品を分析することにより、邦訳がハーン(小泉八雲)の作品像・作家像の形成において果たしてきた役割の大きさを考察したことにある。中でも、これまでのハーン研究ではあまり注目されることのなかった小林正樹監督の『怪談』の映画化手法を分析できたことは特に重要な成果である。

研究成果の概要(英文)：Lafcadio Hearn retold many Japanese folk tales in English and also wrote travelogues and essays on Japanese culture and society. We have various Japanese versions of his works. In this research project, by comparing Hearn's English texts and its Japanese translations, and analyzing each translator's techniques, we revealed the roles of translation in shaping popular images of Hearn and his works.

Employing the theories of translation and adaptation studies, we also analyzed the film adaptation of Hearn's works, which had little academic attention from Hearn scholars, and examined their unique interpretations of the originals.

研究分野：比較文学

キーワード：ラフカディオ・ハーン 小泉八雲 翻訳研究 トランスレーション・スタディーズ アダプテーション

1. 研究開始当初の背景

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の作品の邦訳の歴史は長く、現在まで 100 年以上にわたって、数多くの作品がさまざまな研究者・翻訳家によって日本語に訳されてきた。それらの中には、狭義の翻訳作品だけではなく、映画やアニメーション、絵本、漫画など、より広く翻案（アダプテーション）と呼び得るものも含まれる。このように素材が豊富にあるにも関わらず、それらの邦訳の研究は十分には行われてこなかった。ハーンは、長らく日本人に親しまれてきた作家である。日本でのハーン（八雲）像の形成と変遷を探るためにも、邦訳がそれに与えてきた影響を分析する必要があった。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の邦訳作品を取り上げ、それらがどのように邦訳されているのかを分析することにより、翻訳が形作ってきた作品像や作家像を明らかにすることである。

本研究代表者は、2016 年度から 18 年度に実施した研究課題「ラフカディオ・ハーンの邦訳研究—再話作品を中心に」（16K16785）において、ハーンの数多くの作品の中から、日本で最も広く読まれている怪談作品を取り上げ、その邦訳手法を分析した。本課題では、怪談作品ほど広く読まれているわけではないが、ハーンの人物像を知るには同じく重要である随筆作品や旅行記も研究対象に含めることにより、日本におけるハーンの世界像・作家像をより深く探ることを目的とした。

また、狭義の翻訳ではないが、翻訳の延長線上にある行為として翻案（アダプテーション）にも目を向け、ハーンの世界像の映画版の翻案手法を分析することも目指した。

3. 研究の方法

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の作品には、一つの作品に複数の邦訳が存在しているものが多い。それらの中には長きにわたって定訳として読まれ続けているものもあれば、すでに絶版になってしまっているものもある。本研究の基本的な手法は、考察の対象とする作品につき、その複数の邦訳を収集・整理し、ハーンの原文との比較に加え、邦訳同士の比較も行うことにより、邦訳による作品像・作家像の違いを分析することである。

個々の邦訳を考察するにあたっては、十分に蓄積のあるハーン研究の成果だけではなく、トランスレーション・スタディーズの成果も援用した。トランスレーション・スタディーズは、20 世紀後半から独立した学問分野として発展を続けてきた。1990 年代以降は、それまで主流であった翻訳テキストの言語学的分析を越えて、より大きな社会的・文化的コンテキストから翻訳という行為を捉え直そうとする動きが勢いをもち始め、文学作品の翻訳研究にも十分に活用できる翻訳理論となっている。本研究では、現代の代表的な翻訳理論家の一人であるローレンス・ヴェヌティの「異化」・「同化」翻訳理論や、アントワヌ・ベルマンの「テキスト歪曲システム」論の考えをハーンの世界像の分析に援用した。

また、ハーンの世界像の映画化の分析においては、文学作品から映画への翻案を一種の翻訳と捉えたリンダ・コンスタンツォ・ケアのアダプテーション理論を援用した。

4. 研究成果

(1) 再話作品以外の邦訳研究

日本でラフカディオ・ハーン（小泉八雲）といえば、日本の古い怪談・奇談を英語で語り直した、いわゆる再話作品によってよく知られている。ハーンは旅行記や随筆など、多様な形式の作品を残しているが、邦訳の数は再話作品が一番多い。本研究では、ハーンの世界像研究をさらに深めるために、再話もの以外の作品の邦訳分析も行った。

主に取り組んだのは、「英語教師の日記から」（“From the Diary of an English Teacher”）である。1890 年 4 月に来日したハーンは、同年 7 月に島根県尋常中学校と師範学校の英語教師となる契約を結び、9 月から教壇に立ち始めた。「英語教師の日記から」は、その時の体験について、一部フィクションを交えて日記形式で書いたものである。怪談ものほどではないにせよ、広く読まれているハーンの世界像の一つであり、邦訳も複数存在する。本研究では、それぞれに特徴のある、田部隆次訳（1926 年）、平井呈一訳（1964 年）、平川祐弘訳（1990 年）の三つを取り上げた。

本研究が着目した「英語教師の日記から」の特徴は、小学生が歌うわらべ歌や講堂で斉唱

される「君が代」、県知事が奉読する「教育勅語」など、ハーンがそれら特殊な日本語を英訳だけではなく、ローマ字表記で引用していることである。また、日本語ではないが、学生が授業の課題として書いた英作文を、誤りのあるままに引用していることも、この作品の文体を多様化している一因となっている。本研究は、上記の三つの訳を比較分析することにより、「英語教師の日記から」の多言語性が邦訳によってより顕在化していることを指摘した。「英語教師の日記」からは、近代化・西洋化に邁進する当時の日本へのハーンの見方を知ることのできる貴重な資料であるが、邦訳では、日本語という外国語に関心を示すハーンの姿が強調される結果となっているともいえる。

(2) 映画への翻案の研究

本研究課題では、リンダ・コンスタンツォ・ケアの理論を参考にして、翻案（アダプテーション）も翻訳行為の延長として捉え、ハーンの世界の映画版の研究も行った。ハーンの世界は、日本時代に書かれた再話作品を中心にして、これまで何度も日本語に翻訳されてきたが、映像化の例はそれほど多くはない。小林正樹監督の作品集『怪談』は、ハーンの世界の貴重な映画版である。文芸プロダクションにんじんくらぶ制作、東宝配給により 1965 年に公開された小林監督の『怪談』は、第 18 回カンヌ国際映画祭で審査員特別賞を受賞するなど、国内だけではなく、海外からも高い評価を得た作品であるが、ハーン研究では、これまであまり取り上げられることはなかった。本研究では、小林監督『怪談』の中から、「黒髪」、「耳無し芳一の話」、「雪女」の 3 作品を取り上げ、ハーンの世界と比較することにより、小林監督の映画化手法とそれが提示する作品像を考察した。

① 映画「黒髪」の研究

小林監督の「黒髪」は、『今昔物語』中の一話に材を取ったハーンの世界の「和解」(“The Reconciliation”)の映画化である。本研究では、「黒髪」が、全体的な構成の面では「和解」と大きな変わりはないが、復讐のテーマを明確にして翻案し、さらに、死んだ妻の黒髪が生き物のように武士に襲いかかり、壮健な男がたちまちのうちに醜い老人に変化してしまうというクライマックスにおいて原作にはない凄惨さを表現していることを明らかにした。原作と不即不離の関係を保ちながらも独自の作品像を提示し得ている「黒髪」は、成功した翻案であるといえる。

② 映画「耳無し芳一の話」の研究

小林監督の「耳無し芳一の話」は、同名のハーンの世界の代表作の映画化である。ハーンの世界の「耳無し芳一の話」(“The Story of Mimi-Nashi-Hōichi”)とは、琵琶法師の芳一が、寺が象徴する現実の世界と、平家の亡霊たちが住む異界との間を行き来する物語であるといえる。映画は、平家の旗の色や血に染まったような海、寺の土間に置かれたスイカなど、赤という色彩を巧みに使うことにより、二つの世界が遠く離れていながらもつながっていることを映像によって示している。また、映画は、琵琶法師としての芳一の本分が、和尚のような好事家の耳を楽しませることよりも亡霊たちの鎮魂の方にあることを原作よりも強調して描いている。亡霊の世界から寺に帰ってきたときの芳一の顔色を不自然なまでに青白く、反対に、亡霊の世界にいるときは血色良く写すことにより、芳一にとっての本当の聴衆はどちらであるのかを示している。

両耳を失うという大怪我を負った芳一だったが、おかげで有名になり、物語の最後では、身分の高い人々が寺まで彼の演奏を聴きにくるようになったと語られる。しかし、このように耳を犠牲にして世俗的成功をおさめたことに対して芳一本人はどう思っていたのか、ハーンは何も書いていない。小林監督は、最後の最後で芳一に決定的な台詞を言わせ、一つの答えを出している。「耳無し芳一」となった芳一のもとに多くの人々が演奏を聴きにやってくるのは原作と同じであるが、映画の芳一は、これから演奏しようとしているところで、心の中で「魂こめて、幾千の悲憤にあえぐ霊を弔い続けましょう」とつぶやく。芳一は、表面的には世俗的な平曲愛好者の耳を楽しませるために演奏しているのであるが、本心は、平家の鎮魂のために琵琶を弾いているという解釈を映画は明確に提示している。

③ 映画「雪女」の研究

小林監督の「雪女」は、同名のハーンの世界の原作の映画化である。映画「雪女」の特徴は、物語の随所で主人公の巳之吉を監視するかのよう背景に浮かび上がる巨大な瞳と、巳之吉によって見つめられる雪女の足にある。ハーンの世界でも言及されているものの、特別な役割や重要性を備えているようには見えないこれら二つの身体部位に独自の機能を与え、新たな「雪女」解釈を提示した小林監督のアダプテーションの意義について明らかにした。とくに、雪女に去られた主人公の巳之吉に結末でその心情を吐露させた点は、ハーンの世界には無い新たな視点として重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 風早悟史	4. 巻 152
2. 論文標題 雪女の瞳と足 - 小林正樹監督「雪女」論 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風早悟史	4. 巻 144
2. 論文標題 ラフカディオ・ハーンと映画 - 小林正樹監督「黒髪」における復讐の表象 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風早悟史	4. 巻 5
2. 論文標題 ラフカディオ・ハーン「英語教師の日記から」の邦訳における多言語性の顕在化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山陽小野田市立山口東京理科大学紀要	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 風早悟史
2. 発表標題 雪女のまなざし - 小林正樹監督「雪女」論 -
3. 学会等名 日本比較文化学会第35回九州支部大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 風早悟史
2. 発表標題 琵琶法師の本分 - 小林正樹監督「耳無し芳一の話」論 -
3. 学会等名 日本比較文化学会第34回九州支部大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 風早悟史
2. 発表標題 ラフカディオ・ハーンと映画 - 小林正樹監督「黒髪」における復讐の表象 -
3. 学会等名 日本比較文化学会中部支部令和2年度例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 風早悟史
2. 発表標題 ラフカディオ・ハーンの邦訳研究 - "Yuki-Onna" における雪女の台詞の邦訳を中心に -
3. 学会等名 日本比較文化学会中部支部第11回支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 風早悟史
2. 発表標題 ラフカディオ・ハーン「英語教師の日記から」における翻訳の役割
3. 学会等名 日本比較文化学会中部支部平成30年度例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------